

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 180 回 「許し」の崇高さ！～モーツァルト生誕 250 年にあたり (2 ページ)

2006.12.17

1791 年 12 月 5 日、W.A.モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart) は、僅か 35 年の生涯を閉じた。1756 年生まれだから、今年で生誕 250 年目にあたる。彼の怪奇に満ちた一生は、彼が残した 400 通弱の手紙、約 800 曲の作品や資料から、古今東西、幾つもの研究がなされ、予想や憶測が満ち満ちている。いずれにしろ人類史上、間違いなく「天才」と呼ぶにふさわしい人物の一人と結論付けられている。

5 歳で『クラヴィアコード (ピアノの前身) のためのアンダンテ』(K<sup>ケツヘル</sup> 1) を初めて作曲、8 歳で『交響曲第 1 番』(K16)、11 歳で歌劇『アポロとヒュアキントス』(K38) というオペラを書き上げている。彼の芸術的絶頂期、1 日 4 時間しか作曲時間に使えなかった生活の中で、年間 60 曲の作曲をしたという記録がある (1782 年)。曲の規模の大小はあるが、1 週間に 1 曲のペースで書き上げている計算になる。しかも「命の証」たる楽譜は、書き直しの痕跡が全くない。現存するモーツァルトの楽譜は、あたかも現代技術で印刷されたが如く、完璧そのものである。

彼の生涯の大半、延べ 10 年 2 ヶ月間は「旅」の生活だった。彼の素晴らしい作品の数々は、旅での出会いや経験がなければこの世に生まれてこなかったかもしれない。モーツァルトが旅で得たもの...富、名声、名誉、成功、<sup>しほ</sup>誹謗、<sup>ひぼう</sup>中傷、<sup>ひぼう</sup>疲労、陰謀、傷心、愛情、嫉妬、友情、病気、狼狽、失望...正に彼の生涯そのものであった。

彼の人生における実際の言動と、作品がもつ芸術性には、驚くほどのギャップがある。モーツァルト研究の大家「小林秀雄」は、彼の天才らしからぬ行動を「ほとんど愚劣な言動」と呼び、「完璧なまでの芸術」とのどつともない<sup>かぎり</sup>乖離を、その著作で<sup>しる</sup>記している。

「モーツァルトの曲はほとんど奇跡だ」と言ったのは、あの大作曲家ブラームスである。彼の曲を賞賛する言葉は、たくさんある。...はるかなる天空で、軽やかに流れ続ける音楽、軽快なテンポと楽しく明るいメロディが、透明な美しさの中で展開される。聴く人に癒しや希望を与え、人間としての「優しさ」で全てを包含してしまう至福の音楽...

いずれの表現も、モーツァルトの音楽を見事に言い表していると言えよう。それがモーツァルトの特徴であり、その芸術性を後世の人たちに<sup>とわ</sup>永久に愛され続けてきたのは、<sup>まぎ</sup>紛れもない事実である。

しかし、小生、歳を重ねたせいか、いささか懐疑的になっている。つまり、人間モーツァルトの本質を探るには、表面的な明るさや美しさを見ているだけでは、十分な理解が出来ないと思ったりしている。

軽快で明るさ溢れる中で、時々わずかながら顔を覗かせる「短調」の響き、実はここにもう一つのモーツァルトの本質がある...と思っている。当然モーツァルトは、全体的にいえば「長調」の曲が多い。しかし、その長調の楽曲の中でも転調して短調の部分があったり、もともと短調で書かれた楽曲も、もちろんある。

たとえば交響曲第 25 番 (K183) セレナーデ第 7 番「ハフナー」(K250) ヴァイオリンソナタ第 28 番 (K304) ピアノソナタ第 8 番 (K310) ピアノソナタ第 14 番 (K457) 幻想曲八短調 (K475)、ロンドイ短調 (K511) モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」(K618) ...モーツァルトのもう一つの本質を垣間見る楽曲は、まだまだいくつもある。

何でモーツァルトの本質が「短調」にあるのか？

こんな事実がある。1781 年、モーツァルト 26 歳でコンスタンツェと結婚、彼の芸術性の絶頂期を迎えることとなる。しかし 1783 年、長男死亡、86 年次男死亡、87 年彼の師とも仰いだ父レオポルトが死亡、88 年長女が死亡、89 年次女が死亡、同じころ妻が病魔に悩み闘病生活をする。1790 年は彼の最大の理解者でスポンサーだったヨーゼフ 2 世が死去、不幸は毎年のように続き、モーツァルトは心身ともに耐え難い生活を送っていたに違いない。生活が出来ず、何人もの人に、借金の申し入れの手紙を出している。

しかしこの間書き上げた「フィガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」晩年の「魔笛」は 3 大オペラとし最高傑作として今でも光り輝いている。

芸術家は精神的な部分とその作品に反映される...つい、そんな風に思いがちだが、モーツァルトは違っていた。精神的にはボロボロで、明日の食事さえまならぬ環境の中で、モーツァルトの作品は益々透明度を高め、人間関係の心の世界を見事に音楽にしていっていった。ここがモーツァルトの「天才」たる最大のゆえんと思っている。

モーツァルトの書簡は沢山残っているが、彼自身、思想的・哲学的なことは多くを語っていない。その部分は言葉でなく、自身が作る音楽に全身全霊で投入したに違いない。時代が要求する音楽と自分の芸術観との葛藤、それを乗り越えた時の慈悲と自愛に溢れる音楽の創造、その双方をやりぬいた作曲家、通常な感覚を持った凡人に出来ることではない。

人間の強さと弱さを、最初から見抜いていたモーツァルトの音楽は、「許す」事の大事さ、崇高さを謳い上げている。当時の退廃的貴族社会を批判しつつ、歌劇『後宮からの誘拐』では、タブーとされた宗教さえ超越した「人間の寛容の美しさ」を表している。

それをつくづく感じさせるのは「短調」の存在である。しかも、いかにも「悲しい短調だ！」と、大見得きって表現することのないモーツァルトの表現法は、実に奥深い。晩年、名を告げず突然訪れた使者から、『死者のためのミサ曲』(レクイエム)(K626)の作曲依頼を受けた。現金収入ということもあつたらう。依頼を承諾したが、自らの死を予感していたモーツァルトは、自分のためにレクイエムの作曲に没頭した。結局未完のまま彼は一人寂しく世を去った。見送るものは誰一人なく、墓前に手向ける花もなかった。(生意気にも、モーツァルト生誕 250 年の今年、最後になって一筆書いてみたくなった。言葉足らずで、何ともまとまらなかったが、長々と読んで頂き、ありがたく思っている。)